



緑色で小さくてぶよぶよで、でも すごいヤツ - チャツボボヤ -

海の中のたくさんの生き物たちの大半は、あまり人に注目されないままくらしています。今回紹介する生き物もそうです。慶良間の海の中にふつうにいるのに、ほとんどの人が気づかないか、気づいても「どうでもいい」と思っているような生き物で、その名前はチャツボボヤといひます。

チャツボボヤは、名前から分かるようにホヤの仲間です。日本には300種くらいのホヤの仲間がいるらしいですが、もっとも良く知られているのは、たぶんマボヤという種でしょう。マボヤは瀬戸内海より北の海にすんでいて、身はちょっとクセがありますが食用にされます。マボヤの体には2つの穴が開いていて、片方が入水孔、もう一方が出水孔です。海水は、入水孔 体内 出水孔と流れ、体内をとる時に、水中に含まれるプランクトンが捕らえられ、ホヤの餌になりま

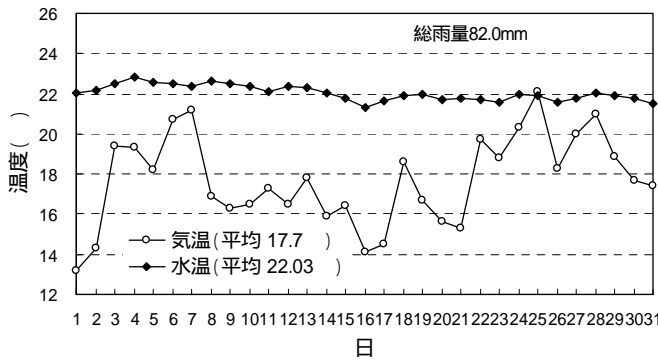
す。このような体のつくりをしているのは、実は、ホヤの中でも“単体ボヤ”と呼ばれているものです。では、チャツボボヤはどうかというと、これは“群体ボヤ”と呼ばれる、ホヤのもう1つのグループになります。単体ボヤと群体ボヤは、その名前のおり体が1個体で成り立っているか、それともたくさんの個体（‘個虫’と呼ぶのがふつうです）が集まってできているかで区別されます。チャツボボヤは、1個体に見えて、実はたくさんの個虫が集まった群体なのです。この場合、1つ1つの個虫の体のしくみは、単体ボヤとほとんど同じです。チャツボボヤには、たくさんの小さな穴と群体の中央に1つの大きな穴が開いています。小さな穴は個々の個虫の入水孔で、大きな穴は‘共同排出孔’と呼ばれるもので、たくさんの個虫それぞれから出された水がまとまって、ここから排出されます。

“群体”というと、造礁サンゴを思い起こす人もいるかもしれませんが、サンゴの多くの種も、たくさんの個虫（ポリプ）が集まった群体ですから、同じようなものです。また、その群体のでき方も群体ボヤとサンゴは似ていて、たくさんの子供が集まってきてできるのではなく、最初の1個虫が分裂や出芽しゅつがをくり返して数を増やしていくのです。

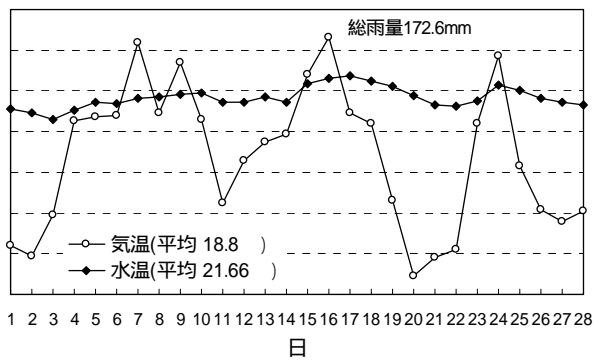
さらにもう1つ、チャツボボヤと造礁サンゴの共通点があります。それは、体内に単細胞の植物を共生させているということです。ただし、サンゴの場合、共

定点観測

2005年1月



2005年2月



生しているのは褐虫藻^{かっちゅうそう}という茶色い藻類ですが、チャツボボヤの場合は緑色のプロクロロンという藻類です。それで、チャツボボヤは緑色をしているのですが、藻類との関係はサンゴの場合と同じで、チャツボボヤも、藻類が光合成で作出した栄養分を受け取って生活のエネルギーにしていると考えられています。

ですから、チャツボボヤは光の届く浅い海にたくさん生息しています。けれども、浅い海には、生物に害を与える紫外線がたくさん降り注ぎます。これまでの研究によると、群体ボヤの仲間は、うまくその被害を防ぐしくみをもっているようです。群体ボヤの仲間であるネンエキボヤの1種の表面の部分には、紫外線を吸収する物質がたくさん含まれていて、そこで紫外線が吸収されるために、体の内側にはあまり届かずにすむことが、阿嘉島臨海研究所を訪れた研究者によって明らかにされました。その結果、プロクロロンも紫外線から守られ、十分に光合成を行えるでしょう。まだ、このしくみはチャツボボヤでは見つけられていないようですが、同じようなしくみをもっているかもしれません。

チャツボボヤを海で見かけたら、「ぶよぶよしたヘンなヤツ」とばかり思わずに、小さいくせにたいした生き物だと思ってもらえるとうれしいです。

阿嘉島の海より



2月4日、阿嘉小中学校体育館で阿嘉小中学校の学習発表会がありました。生徒が描いた絵画や書道の作品展示、島のお母さん達に教わりながら作ったお漬物の試食などがありました。そして舞台では、お漬物作りに挑戦した時のスライドにナレーションをつけて発表したり、一輪車大会の様子をスピーチしたり、ビーチで集めた貝殻をそれぞれのビーチごとに整理して発表したりと、子供たちがこの日のために一生懸命準備した数々の発表をみることができました。また、高学年の生徒達は阿嘉島のサンゴ礁を題材にして身近にある海の大切さや不思議さを劇にしてみせてくれました。夏に臨海研究所で観察したサンゴの産卵や幼生、天敵のオニヒトデ、そしてどうして海が弱ってしまったのかなどとてもよく調べられていて驚きました。